

令和 8 年 8 月 28 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

奥川並断層の長期評価

これまでに行われた調査研究成果に基づいて、奥川並（おくこうなみ）断層の諸特性を次のように評価した。

表 1 奥川並断層の特性

項 目	特 性	信頼度 (注 1)	根 拠 (注 2)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	奥川並断層		文献 1、2、3、4
(2) 断層の位置・形状	断層の位置		文献 1、2、3、4
	(北西端) 北緯 35° 39.8′ 東経 136° 10.8′	△	
	(南東端) 北緯 35° 36.8′ 東経 136° 17.8′	△	
	地表の断層の長さ 約 12 km 一般走向 N62° W	△ ○	文献 1、3 一般走向は断層の両端を結んだ方向。
(3) ずれの向きの種類	左横ずれ断層	○	文献 1、2、3、4
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直（地表近傍）	○	文献 4
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約 0 km	◎	文献 4
	下端の深さ 15 km 程度	△	地震活動（D100）から推定。（注 3）
	断層面の幅 15 km 程度	△	断層面の傾斜と地震発生層の深さから推定。地下の傾斜が地表近傍と同様と仮定。
(3) 断層面の長さ	不明	—	
3. 断層の過去の活動			

(1) 平均的なずれの速度	不明	—	
(2) 過去の活動時期	活動 1（最新活動） 約 4 千 6 百年前以後、 約 2 千 4 百年前以前	○	文献 4 年代値の詳細が示されていないため、暦年較正は行っていない。
(3) 1 回のずれの量	1 m 程度（左横ずれ）	△	断層の長さから推定。（注 4）
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	全体で 1 区間	○	
4. 断層の将来の活動			
(1) 活動時の地震規模	M6.6 程度	▲	断層の長さから推定。（注 5）
5. 地震後経過率			
(1) 地震後経過率（注 6）	不明	—	

注 1：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注 2：文献については、以下のとおり。

文献 1：岡田篤正・今泉俊文・熊原康博・千田 昇・東郷正美・中田 高（2005）：1:25,000 都市圏活断層図「敦賀」．国土地理院技術資料，D1—No. 449．

文献 2：今泉俊文・宮内崇裕・堤 浩之・中田 高編（2018）：「活断層詳細デジタルマップ 新編」．東京大学出版会，154p．

文献 3：岡田篤正・東郷正美編（2000）：「近畿の活断層」．東京大学出版会，395p．

文献 4：尾池和夫・岡田篤正・杉山雄一・松田時彦・木戸研太郎・松井和夫・園田玉紀・斉藤 勝（2003）：琵琶湖北方の奥川並断層の詳細な位置と完新世の断層活動．日本第四紀学会講演要旨集，**33**，120–121．

文献 5：Asano, K. and Iwata, T. (2016) : Source rupture processes of the foreshock and mainshock in the 2016 Kumamoto earthquake sequence estimated from the kinematic waveform inversion of strong motion data. Earth Planets Space, **68**:147, doi:10.1186/s40623-016-0519-9.

文献 6：気象庁（2016）：2016 年 4 月 16 日熊本県熊本地方の地震—近地強震波形による震源過程解析（暫定）—. <https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/sourceprocess/event/2016041601250547near>（2024 年 1 月確認）．

文献 7：地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会（2026）：「「活断層の長期評価手法（暫定版）」報告書（追補 1）」．4p．

文献 8：松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文（1980）：1896年陸羽地震の地震断層．地震研究所彙報，**55**，795-855．

文献 9：松田時彦（1975）：活断層から発生する地震の規模と周期について．地震第 2 輯，**28**，269-283．

注 3：主要活断層の評価の中では、断層面の下端の深さは、地震観測結果から推定される地震発生層の下限の深さに基づいて推定を行っている。2016 年に発生した熊本地震の例では、本震のすべり領域が、上記の方法で推定していた断層面の下端の深さよりも更に 5 km 程度深い場所まで延びていた可能性が指摘された（例えば、文献 5、6）。そのため、地震の際に実際に活動しうる断層面の下端は、推定された断層面の下端に対して 5 km 程度深くなる可能性があることに留意されたい（文献 7）。

注 4：文献 8 による経験式によれば、1 回の活動に伴うずれの量 D (m) は、断層の長さ L (km) を用いて、 $D=0.1L$ と表される。

注 5：文献 9 による経験式によれば、活動時の地震規模 M (マグニチュード) は、断層の長さ L (km) を用いて、 $M=(\log L+2.9)/0.6$ と表される。

ただし、長さ 20km 未満の活断層には適用できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。

注 6：最新活動（地震発生）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると 1.0 となる。

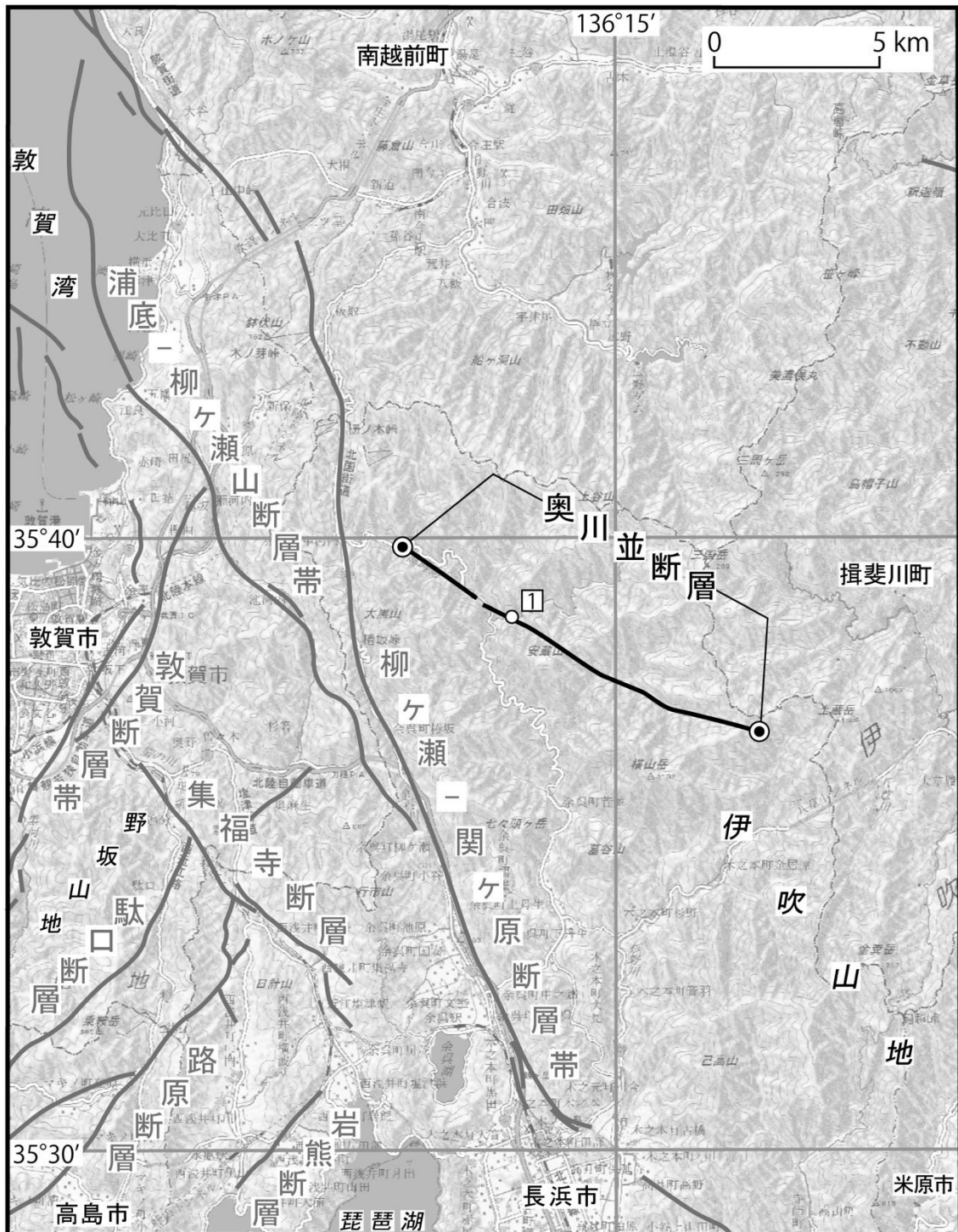


図1 奥川並断層の位置と主な調査地点

◎：断層の端点 1：尾池ほか（2003）によるトレンチ調査地点
基図は国土地理院発行電子地形図 20 万「岐阜」